

## 東日本大震災

平成 23 年 4 月記  
仙台支部調査役 亀井重信

(その時)

3 月 11 日 14 時 41 分「緊急地震速報」に続いて経験したことのない大きな揺れがあり、支部職員は青ざめ動くことも出来ない。少し落ち着いたとき、佐藤事務員とタクシーで帰宅しようとしたが無理だった。多賀城まで(約 15km)歩こうと決め、二人で黙々と歩き始めた。途中余震で大きく揺れ不安のなか、自宅の近くに行くと津波で進むことも出来ない。道路は流された自動車やゴミやらが折り重なっている。その間情報は全く入らず、消防車・パトカーもいるが、彼らにも情報が入らず状況が分かっていないらしい。携帯電話も発信規制でほとんど役に立たない。7 時間位かけて何とか自宅につくと我が家だけかすかな蠟燭の灯りがある。翌朝、直ぐに同級生の自宅に行くが、玄関に「避難所にいます」の張り紙。帰る途中携帯に着信があり、出ると安否確認できない担当技術者から「何処にいる」「イオンの屋上で避難」そこで電話が切れ交信できず。いろいろあったが、全員の無事を確認できた。

物的損失は、自動車 5 台(内 1 台は個人)が流失、勤務していた事務所も久慈・塩釜・小名浜の 1 階がほぼ冠水。職員の被害では、自宅の損失は無し。一番の被害者は、私で両親の墓が津波の襲来を受け、飛散した墓石の上にマイクロバス・人家の屋根・土砂がうずたかく手のつけようもない。お寺も辛うじて柱だけ残して悲惨な状態だった。

(支援物資)

被災を受けて直ぐに、各支部から沢山の支援物資をいただきました。支部は大きな被害も無かったのですが、水・電気・ガスのライフラインがほとんど駄目で、商店も開店せず、商品を求めて朝の 3 時頃から行列。商店も倒壊した店から商品を取り出し、路上で販売。その商品も直ぐに無くなり、次は何時入荷するか分からない状態だったので、支援物資は本当に助かりました。街には多くの人が、リュックを背負い商品を求めて右往左往していました。

皆さんからの支援物資は、支部職員・国土交通省の事務所で使用させて貰いました。それでも沢山の物資が残りましたので、被害の大きかった石巻で 1000 名の避難者がいた湊小学校で使って貰うことにし、軽バン 2 台で搬入しました。対策本部長に会って「皆さんで有効に使用してください」と渡すと、本当に喜んでくれました。本部長自身も、自宅を流され避難所生活している市議員でした。避難している人達は、着の身着のままで本当に悲惨な状態です。自宅も着る物もなく、現金も無い状態で身を寄せ合っていていくらかでも応援をしたいと痛切に感じました。



石巻の湊小学校避難所にて 対策本部長

(再起に向けて)

被災後、直ぐに再建に向けての作業が始まりました。3月12～13日は職員の安否確認に費やされましたが、14日からは被害状況の調査、事務所の整理、港の再開に向けて東北地方整備局塩釜港湾事務所も動きだし、仙台支部も応援のため事務所に出ました。すべき事が沢山あり、SCOPEは主に後方支援に徹しました。津波で浸水した建物からの土砂の搬出、その中から書類の拾い出しを泥だらけになりながら直轄職員との力仕事です。事務所の自動車もほとんど流され、連絡車が無いことを聞き、直ぐに軽バン3台を提供し、最敬礼で感謝の気持ちを伝えて貰いました。その際、支援物資の中から、ガソリンも提供しました。

17日仙台港に国土交通省の油回収船「海翔丸」が支援物資を積んで入港しました。その時、事務所の人達の喜びは大変なもので、私自身もいくらかでも応援できた充実感で一杯でした。翌日、支援物資を運搬するのにSCOPEで用意した軽バン3台に満載の資材を積み、被害の大きかった山元町に向かいました。

約1ヶ月が経ち仙台の街は、いつもの落ち着きを取り戻していますが、津波の被害に遭ったところは壊滅的にやられ、自動車で通ると全く別の街になっています。残骸の整理も進んで気持ちの中に「再建するのだ」との意欲がわいてきています。まだ、交通網がガタガタの状態ですが、一番再開の早かったのは港で、新聞に第一船入港の記事を多くの市民が大喜びで、再起の気持ちを感じました。4月13日から仙台空港も一部で使用開始になり、鉄道網も整備されつつあります。今年の仙台七夕も開かれるようで、その頃までは落ち着きを取り戻しているでしょう。

世界中から応援を貰い、また今回の皆さんの大きな支援に感謝します。

地震の翌朝、不安な気持ちの中段々と明るくなり「必ず朝は来るのだ」と感激したのは忘れられない。「頑張ろう東北」



## 東日本大震災復興支援室～東北対策部について

平成23年10月記

仙台支部長 木村 孝

3月11日に発生した東日本大震災で犠牲となられた方のご冥福をお祈りします。

### 1. 被災時の支部の様子

地震発生時、支部にいた5名の職員はこれまで経験したことのない大きな揺れに驚愕し、机の下で顔を出したり引っ込めたりして揺れがおさまるのを待った。私は皆の無事を確認した後、遠方の多賀城市方面に住む職員はタクシーを探して急いで帰宅するように促した。タクシーは結局つかまらず、職員は3時間近く歩いて帰ったのだが、逆にタクシーが拾えて多賀城に早く着いていれば、間違いなく津波にのまれていたタイミングだった。

過去の経験から、電話は地震発生後30分を経過するとつながりにくくなることが分かっていたので、急いで本部に連絡を取り、現在仙台支部の建物内にいる職員は全員無事であると伝えた。本部では、皆避難中とのことであった。後日、本部では仙台支部との連絡が地震後数日は取れなかったことになっていると聞き、混乱の中で第一報が正しく伝わっていなかったことが分かった。

私自身は、自宅の借家が大規模半壊で住めなくなったため、当日夜から小学校の避難所に身を寄せ、段ボールを敷いて休みながら職員の安否確認に努めた。（段ボールの保温力とクッション性がとても優れていることが分かり、繁華街などの道端で愛用している人が多い理由が分かった。）

仙台港で津波を受けた職員とは翌日の朝になっても連絡が取れず途方に暮れていたが、支部調査役が携帯電話で何度も呼びかけたところ、瞬間的につながった。今どこかと聞くと、「ジャスコ」と一言返答があって、すぐ不通になった。しかし、職員の無事を確認でき、これで皆が生き延びることができたと支部職員一同胸をなでおろした。余談だが、そのスーパーでは数百人の避難者に対し、店頭にある毛布を防寒用に無料で配布したという。

震災発生の数日後から、他支部からの支援物資が届き始めた。新潟支部長には、自らマイクロバスを先導し、雪の峠を越えて仙台まで物資を届けていただいた。また、北海道支部職員には直接八戸へ支援物資を届けていただいた。支

援物資の内容はガソリンやガスボンベなどの燃料から、食料、さらに生活必需品として毛布や簡易ベッド、爪切りの果てまで届けていただき、それぞれの場面でとても役に立った。本部および各支部からの心づかいがありがたく、心から御礼申し上げたい。



2011/3/12大規模半壊した自宅



2011/3/21各支部からの支援物資を小名浜港へ移送

## 2. 復興支援体制構築に向けて

被害の全容が明らかになるにつれ、当局の災害査定等には数十人規模の支援体制を構築する必要があり、仙台支部だけではとても対応できないことがわかってきた。そこで、3月中旬に本部理事が来仙された際、「羽田空港支部でのプロジェクト時対応」を念頭に支援体制を構築してほしい旨申し入れたが、本部では既に支援室設置準備に入っていた。

本部の指導もあり、前仙台支部長土屋氏に災害査定業務支援の指導役を依頼したところ、快諾していただいた。問題は、釜石港や宮古港のように、生活・勤務環境が破壊された所へ初めて赴任する技術者の面倒を見つつ、当局と資料作成について調整とするという、非常に困難な仕事をしていただける方を見つけることであった。いろいろと考えたあげく、ハタと思い出して前々仙台支部長の赤間氏に連絡した。赤間氏は、「地震後、港湾施設の災害復旧を急ぐ必要があることは分かっていた。自分はボランティアでもいいからお役に立ちたいと考えている。だから4月4日より体は空けてある」と二つ返事で引き受けてくださり、胸が熱くなった。

各支部からはエース級の技術者が復興支援室併任となって東北応援に駆けつけてくれ、期待通りの活躍を見せてくれた。直轄港湾事務所の中には担当者の帰任に際してお別れ会を開いてくれたところもあり、当局からは高い評価を受けている。

9月末には現地査定が1港を除き終了したことから、復興支援室を設置した当初の目的はほぼ達成されたものと考えている。



2011/3/24仙台港確認 背後は航路啓開中のグラブ船、右端は岸壁に乗り上げた貨物船  
(左から富沢上席調査役、佐藤復興支援室長、筆者)



2011/3/24 仙台空港



2011/6/14常磐線坂元駅（宮城県）

ホーム連絡橋下のレールまで流失

### 3. 今後の災害時の緊急支援のために

東日本大震災ではこれまでに前例のないほどの甚大な被害を受け、仙台支部でも臨機応変の対応を出来るだけ行ってきた。その中で、有効だったことと今後は改善した方がよいことを述べておきたい。

#### ①支援技術者の確保について

##### ○有効だったこと

今回は各支部から信頼できる即戦力の職員を派遣していただき、各支部にはご迷惑をおかけしたが、このような非常事態時には有効な手段であると考えている。

##### ●改善が必要なこと

今回、同一人の配置期間を途中で変更し、延期した事例があったが、モチベーション維持の観点で大変ご苦勞をかけ、誤りであったと感じた。今後、全体配置期間の見込みが不明の場合でも、劣悪な勤務環境の時は、配置期間を三ヶ月程度に区切り延期しないことが望ましい。なお、交替にあたっては重複期間を持たせ、引き継ぎをスム

ーズにさせる必要がある。

## ②支援技術者の配置について

### ○有効だったこと

今回の震災では、東北沿岸の広範囲にわたって港湾が被災し、災害査定調査資料作成を各事務所・出張所で行ったため、当センターの支援技術者も分散せざるを得なかった。しかし、6人が同一フロアで勤務できた「チーム塩竈」はグループで活動し、良い結果を生んだ。支援技術者をチームで配置することには、業務効率の向上とモチベーションの維持の有効であると考ええる。

#### A.業務効率の向上

(①業務方針について全体を統一して作業に入ることにより、結果的に手直しの回数が少なくて済む、②技術者ごとに業務量を再配できる、③アドバイザー及び遊軍を効率的に配置できる、④IT関係では同一フロアの場合PCネットワークが経済的に可能となり、データーの共有や大型プリンター共有を行いやすい)

#### B.モチベーションの維持

(震災直後の現場に赴くことは精神的な負担も大きく、業務も大変であるが、グループでの活動はお互いをケアでき、精神衛生上によい)

## ③バックアップ体制について

### ●改善が必要なこと

各個人が復興支援のため高い志をもち赴任しても、バックアップ体制が整っていないくは三ヶ月以上頑張ることはできない。住と食について最低限の環境を整える必要がある。今回は震災では被災地は生活基盤が全てが失われたため、相部屋で雑魚寝を三ヶ月以上続けざるを得なかったり、長期間にわたって温かい食事を取れなかった事例があり、担当技術者に大変なご苦勞をかけた。

### ○有効だったこと

住環境を改善するには、ある程度通常の生活ができる場所を遠方にでも確保し、社有車で通勤するという方法があり、今回は約45キロ離れた所から通勤したという事例がある。大変厳しい環境で勤務する職員には、行動の手足となる車を用意し、生活物資、食料、勤務用品の調達を自ら行ってもらうという方法が効果的であった。

当然ながら、支部および本部は支援できることは何でもするという態度を表し、物理的にも精神的にも支えることが必要であるのは言うまでもない。

## 4. 終わりに

本部及び各支部からの暖かいご支援のおかげで、仙台支部職員は食料等調達のため店頭と並ぶことなく職務に専念出来た。自分は避難用宿舎を緊急的に本部に用意してもらい、日々の食料と衣類は支援物資に頼っていた。また、自分の頭の中は当局及び本部との調整や支部態勢構築などに占領されていたため、被災を悲しんでいる余地などが無く、復興支

援室構築まで元気に乗り切ることが出来たと思う。つくづく組織によって生かされたと考えている。

震災復興支援はスタートしたばかりでこれから本番となるが、仙台支部をこれまで支えてくれた本部及び各支部の皆様と、復興支援室併任となり被災地の現場でご尽力いただいた各支部のTEの皆様に心から御礼申し上げたい。